

# 愚と罪源の構造

## 『パルチヴァール』の「tumpheit」にみる罪の様相

森下 勇矢

### 序

ドイツ中世における「愚者概念 Narrenidee」の様相を論じるうえで、現代語の「愚 Dummheit」の派生元であり、日本語で「愚かさ」や「単純さ」、さらには「未熟さ」などとも訳出される「tumpheit」は殊に重要なものである。古高ドイツ語が用いられた時代においてすでに、「tumpheit」は愚かさを指す語であり、さらにそれは宗教上否定的な意味合いを持つものとして扱われてきた。<sup>1</sup> 中世に至り、この語が持つ性質は、ヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ (Wolfram von Eschenbach, um 1160-um 1220) の『パルチヴァール』 (Parzival, um 1200) の根幹をなすこととなる。<sup>2</sup> そして、この作品内で用いられる「tumpheit」は幼少期特有の未熟さや宮廷作法に関する経験不足、さらには神に対する反抗心などの愚かさを含み、その意味するところの広範さの面でセバスティアン・ブランツ (Sebastian Brant, 1457-1521) による「Narr」に近い。<sup>3</sup>

ヨアヒム・ブムケによれば、パルチヴァールの「tumpheit」は彼の母親ヘルツェロイデから受け継いだ「清らかさ kiusche」や「誠実さ triuwe」、さらには父ガムレットから受け継いだ「勇猛さ manheit」を内包しており、これらがパルチヴァールの振る舞いに大きな影響を及ぼすと論じている。<sup>4</sup> その指摘通り、パルチヴァールの「tumpheit」は多義的であり、単なる愚かさに留まらず、彼の物語中の行動に様々な形で現れる。そこで見られる「tumpheit」の性質は、必ずしも否定的なものではなく、中世神学の文脈内で肯定的な見方をされた「単純さ einvalt」ないし、これと同意のラテン語「simplicitas」と結びつけて論じられることもある。実際にヴォルフラム自身は「einvalt」という語を『パルチヴァール』にて一度 (689, 27) しか用いないものの、ブムケは『若きティトゥレル』 (1260-1275) の

<sup>1</sup> 古高ドイツ語文献の典拠によれば、「unfruat」や「unwise」と並んで多く用いられたのが「tump」ないし「dump」であり、「stultitia」に対応する語として用いられた。これは、神について認識するために不可欠となる「sapientia」の欠落を示すものである。ケネカーは、「tumpheit」が否定的な意味合いで用いられる主な事例として、『タチアーン』 (Tatian, um 830) や『オトフリートの福音書』 (Otfrids Evangelienbuch, 863-871) などを挙げている。Vgl. Barbara Könnker: *Wesen und Wandlung der Narrenidee im Zeitalter des Humanismus—Brant-Mumer-Erasmus*, Stuttgart (Steiner Franz) 1966, S. 16.

<sup>2</sup> 作品本文からの引用は、Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Hg. von Eberhard Nellmann. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker) 2006. から行う。なお、引用の際には詩節番号から詩行番号の順に付記する。

<sup>3</sup> Vgl. Könnker (1966) S. 18.

<sup>4</sup> Joachim Bumke: *Die Blutstropfen im Schnee. Über Wahrnehmung und Erkenntnis im »Parzival« Wolframs von Eschenbach*, Tübingen (Niemeyer) 2001, S. 108.

著者アルブレヒトが、アンフォルタスに対する問いかけをパルチヴァールが怠った原因を彼の「単純さ」に帰していたとしている。<sup>5</sup>

以上のような愚を主題とした議論をふまえ、本稿では『パルチヴァール』の各所に散りばめられた主人公が持つ「tumpheit」の表れや、これと「単純さ」ならびに「tumpheit」の否定的側面との関連について考察を進めていく。これらは前述の通り、元来宗教的な文脈の中で用いられる語・概念であったゆえ、神学的な議論を避けての考察は困難である。そのため分析にあたり、従来多くの研究がなされてきたパルチヴァールの罪についても視野に入れる。さらには、ヴォルフラムが用いた「tumpheit」が中世文学の枠内でどのような立ち位置を占めていたかを確認するとともに、この概念が『阿呆船』（Das Narrenschiff, 1494）の発刊以降に目覚ましい興盛を見せた「愚者文学 Narrenliteratur」と結びつく過程についても触れ、中世から近世にかけての愚者概念の変遷をより明確化させることを試みる。

## 1. 幼い愚者

### 1.1 *simplicitas*

パルチヴァールの「tumpheit」に含まれる先述の「単純さ」の概念は、中世の神学者らによって「純粹」かつ「悪から自由な状態 *frei vom Bösen*」<sup>6</sup>として解釈されている。さらに純真無垢かつ従順さを示す「単純さ」は本来、キリスト教の土壌で育まれたものであり、その概念の根源は新約聖書マタイ 5章3節やコリント人への手紙Iの1章18-31節などにある。<sup>7</sup>パルチヴァールの幼少期には、彼の「単純さ」はより際立ち、指導者の教えに対し素直に従う態度にも明らかである。悪を知らぬその清らかな心は、聖人的な「単純さ」を宿すものであろう。

パルチヴァールの「単純さ」は、彼の幼少期の振る舞いに最も明瞭な形で表出するが、ここではまずその表れかたについて見ておきたい。勇敢かつ優れた騎士であるアンショウヴェの王ガンディーンの子ガムレットと、ヴァーレイスの女王ヘルツェロイデの間に生まれたパルチヴァールは、ガムレットが戦いで命を落としたのち、ヘルツェロイデとともに騎士社会から離れた森の中に移り住んでいた。これは、パルチヴァールが父同様に騎士として命を落とすことを避けるためであり、騎士についてのあらゆる話題は禁止されてい

---

<sup>5</sup> Ebd.

<sup>6</sup> Wemer Welzig: *Beispielhafte Figuren*, Graz Köln (Hermann Böhlau Nachf.) 1963, S. 47.

<sup>7</sup> Vgl. ebd. マタイの福音書 5章3節では、イエスによって山上の説教が行われるが、その中で「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです」とイエスは語る。またコリント人への手紙Iの1章18-31章では、「十字架のことは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です」という言葉から始まり、「しかし神は、知恵ある者を恥じ入らせるために、この世の愚かな者を選び（……）」という言葉を持って現世的な知への批判が行われるなど、著者であるパウロによって愚と信仰や神に関する議論が展開されていく。新改訳聖書（日本聖書刊行会翻訳）2017,いのちのことば社。

た。そこではパルチヴァールに対する王子としての教育は何一つなされず、騎士や神がどのようなものかを知らないほどに愚かであった。

ある日、パルチヴァールは「ああ、お母さん、神とはなんでしょう。ôwê muoter, waz ist got? (119, 17)」とヘルツェロイデに問いを投げかける。そして彼は、彼女から「彼は太陽よりも明るいのです。er ist noch liechter denne dertac (119, 19)」と教えられたがゆえに、のちに遭遇することとなる光り輝く騎士を神であると勘違いしてしまう。母や騎士との対話から、パルチヴァールの滑稽なまでの愚かさを見てとれるものの、より強く彼の「tumpheit」を特徴づけているのは、経験不足ゆえに与えられた教えに従ってしまう点であろう。パルチヴァールは自身の愚かさゆえに、母の教えに誤った形で従うのである。これと類似した彼の誤謬は以後も繰り返され、その結果の深刻さは程度を増していくが、その極め付けともいうべきは以下のエピソードにて生じる。

騎士になるべく母の元を去ったパルチヴァールは、老騎士グルネマンツの教育により騎士としての嗜みを身につけた人物へと成長していく。しかしながら、グルネマンツがパルチヴァールに与えた「むやみに尋ねてはならない im sult niht vil gevragen (172, 18)」という戒めを盲目的に遵守し、パルチヴァールは聖杯城の城主アンフォルタスに彼の苦しみの理由を尋ねなかったがゆえに、「名誉と騎士の栄れ êre und nîterlicher prîs (255, 27)」を失ってしまう。グルネマンツの教えを遵守したがために、アンフォルタスに対する問いを怠ることに通じる筋書きは、その教えがアンフォルタスを救済するための役割を果たしえないことを示す。それは次章にて再び述べるが、彼の教えが主に騎士道に関するためであり、アンフォルタスの救済に必要なのはこれとは別の次元にあるもの、つまりはキリスト的隣人愛への理解であろう。そして、母の教えと同様、グルネマンツの教えに誤った形で従ってしまうパルチヴァールの愚行は、指導者への従順を可能たらしめる「単純さ」によるものであると同時に、「tumpheit」が持つ否定的な側面である「無知 ignorantia」の表れである。これはアダムの墮落以降、あらゆる人間が担わねばならなくなった原罪の表出であるが、この愚については第三章にて詳細に扱うこととする。

## 1.2 道化の姿

パルチヴァールの幼少期の愚かさに関連して、彼が身につけていた愚のメルクマールともいえる道化服についても言及しておかねばならない。これは、アルトゥースのもとへと旅立とうするパルチヴァールが、愚か者として嘲られて自分の元に戻ってくるように、ヘルツェロイデが彼のために仕立てたものである。

夫人（ヘルツェロイデ）は布地を手に取り、彼女はそれからシャツとズボンを作立てた。これらは一つに繋がっており、彼の白い足の真ん中まで届くものだった。

これは愚者の衣装とわかるもので、上部には頭巾が縫い付けられていた。剥ぎたての仔牛の皮を用いて、長靴が一組作られたが、これらは彼の両足に合わせて裁断された。深い悲しみがやむことは無かったのであるが。

diu frouwe nam ein sactuoch:  
si sneit im hemde unde bruoch,  
daz doch an eime stücke erschein,  
unz enmitten an sîn blankez bein.  
daz wart für tôren kleit erkannt.  
ein gugel man obene drûfe vant.  
al frisch rûch kelberîn  
von einer hût zwei ribbalîn  
nâch sînen beinen wart gesnitn.  
dâ wart grôz jâmer niht vermitn.  
(127, 1-10)

これを着せられたパルチヴァールは、親類にあたる赤い騎士イテールを打ち倒し、彼の鎧を奪い取ったあとも道化服を脱ぐことはない。グルネマンツのもとで初めてこの服を脱ぎ去ることとなるが、母から道化服を与えられたパルチヴァールは、しばらくこれを脱ぐことを拒み続け、騎士らしい服装をするように命じられた際には、「私の母からいただいたものは、捨てるわけにはいかない。たとえそれが役に立とうが立たなかろうがな。」<sup>8</sup>と怒って言い放つほどであった。

パルチヴァールにとっての道化服は、母ヘルツェロイデの形見であるとともに、自分のもとへ帰らせるという彼女の意図が込められていたゆえに、母子の結びつきを象徴するものであった。そして、騎士社会から逸脱した滑稽な衣装であるにも関わらず、これを執拗に手放すまいとする態度は、母を頑なに慕い続けるパルチヴァールの「単純さ」を示す。しかし、彼の「単純さ」に由来する従順さのベクトルは、母から新しい指導者であるグルネマンツへと向けられていく。このことは、グルネマンツの教育が以下の言葉で始まることから明らかである

<sup>8</sup> „swas mir gap mîn muoter, / des sol vil wênic von mir komm, / ez gê ze schaden odr ze fromm“ (156-157, 30-2)

あなたは子供のように話すのだな。いつあなたは母の話を止めて、他の話をするのだ。私の教えを聞くが良い。これはあなたを悪行から遠ざけよう。

ir redet als ein kindelîn.  
wan geswîgt ir iwerr muoter gar  
und nemet anderr mære war?  
habt iuch an mînen râ:  
der scheidet iuch von missetât.  
(170, 10-14)

これ以降、グルネマンツの教えがパルチヴァールの行動を全面的に規定することとなり、アンフォルタスへの問いかけを怠る要因となる。パルチヴァールはグルネマンツの城の寢床に入る前に道化服を脱ぐのであるが、この服が示すところの愚かさはグルネマンツの教えを受けて初めて捨て去られる。<sup>9</sup>母がパルチヴァールに与えた愚の象徴を捨て、さらに師から騎士としての作法を学ぶことでようやく、彼は以前の愚者としての状態を脱するのである。これは同時に、道化服によってパルチヴァールに惨めな思いをさせ、自分のもとに帰らせるという母の計画の破綻であり、彼がもはや嘲りの対象ではないことを示すのである。騎士社会では異質な道化服が失われることにより、パルチヴァールはその社会で騎士として認められる。しかしながら、パルチヴァールがグルネマンツのもとで捨て去った愚かさとは、あくまでも知識の足りない子供特有の愚や、騎士社会に関わる「未熟さ」であり、彼の「tumpheit」の一側面にすぎない。パルチヴァールに残された愚者の性質は、彼をどのような境遇に陥れるのであろうか。

## 2. 神に抗う愚者

### 2.1 絶望と疑念

聖杯城で苦しむアンフォルタスに対し、問いを立てることを怠ったことについて、パルチヴァールは醜い女クンドリーエに厳しく非難されてしまう。戒めを遵守したがために、彼はあらゆる栄誉を失い、大きな苦しみに突き落とされる。己の境遇を思い、悲しみに暮れる彼は、円卓の騎士の一人であるガーヴァーンから「神があなたに幸運を与え給わんことを *dâ geb got gelücke zuo* (331, 27)」と呼びかけられた際、以下のように答える。

---

<sup>9</sup>グルネマンツのもとをパルチヴァールが去る際に、語り手は「彼が愚かさを捨て去った時から、ガハムレトの血が美しいリアーセへの思いを絶えず掻き立て続けた (.....)」 „Sît er tumpheit âne wart, / done wolt in Gahamuretes art / denkens niht erlâzen / nach der schoenen Liâzen (.....)“ (179, 23-26) と説明する。リアーセはグルネマンツの娘であるが、パルチヴァールは戦いを求めて彼らの住む都グラールハルツを去ったのである。

ああ、神とは何だろうか。  
神が絶大な権力を持ち、その力を示し得るのならば、我々にこうした恥辱を与えることはなかっただろう。神の恩寵について知った時から、私は神に奉仕してきたが、今後彼に仕えることは断る。  
神が私を憎むならば、その憎しみを私は受けるつもりだ。

wê waz ist got?  
wær der gewaldec, sölhen spot  
het er uns pêden niht gegeben,  
kunde got mit kreften leb. n.  
Ich was im diens untertân,  
sît ich genâden mich versan.  
nun wil i'm dienst widersagn:  
hât er haz, den will ich tragen.  
(332 v. 1-8)

パルチヴァールの神への拒絶が明確に表れたこの箇所は、ネルマンによれば、ヴォルフラムが原典としたとされるクレチアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes, um1135-um1185) の『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』 (Perceval ou le Conte du Graal, 1181-1190) に対して、著者による最も大きな改変が加えられた部分の一つである。<sup>10</sup> パルチヴァールの「ああ、神とは何だろうか。wê waz ist got?」という言葉と幼児期に彼が発した「ああお母さん、神とはなんでしょう。ôwê muoter, waz ist got? (119, 17)」という言葉の間では、愚かでありながらも純真で清らかなパルチヴァールの姿と、絶望して神の全能の力を疑い、神に背いた罪人としての彼の姿が明瞭に対比されている。加えて、パルチヴァールが神を封建君主のようにみなしているとネルマンは説明しており、この論に沿えばパルチヴァールにとっての神と人間の関係とは、いわば封建主従関係的なそれであって、この考え方は彼がグルネマンツによる騎士の教えを誤った形で把握したことによる。<sup>11</sup> パルチヴァールの「絶望」はつまり、神に対する奉公が報われなかったことに起因するのであり、幼少期の彼に見たような、教えを適切に用いえない愚かさが表れている。

そもそもパルチヴァールが陥った「絶望 *desperatio*」とは、「悲しみ *tristitia*」などと共に、七つの大罪 (罪源) の一つである「怠惰 *acedia*」に属するものである。<sup>12</sup> ローマ教皇グレゴリウス一世 (Gregor der Große, um 504-604) が「悲しみ」と「怠惰」を統合したことによ

<sup>10</sup> Vgl. Eberhard Nellmann: Kommentar. In: Wolfram von Eschenbach: Parzival. Hg. von Eberhard Nellmann, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker) 2006, S. 622.

<sup>11</sup> Vgl. ebd.

<sup>12</sup> 七つの大罪は具体的な行動を伴う罪ではないため、これら自体が罪であるとするのは誤りである。そのため、七つの罪源 (Wurzelsünden) と訳されることが多い。この罪に関する考えは本来、4世紀にエジプトの荒野で生きた修行僧エヴァグリオス・ポンティコス (Euagrios Pontikos, 345-399) によって、悪魔によって人に与えられた八つの想念を起源としている。Vgl. Susanne Wolf: Die sieben Todsünden, 2013. [http://www.design-wolff.de/7\\_todsunden\\_sw.pdf](http://www.design-wolff.de/7_todsunden_sw.pdf), S. 4; Christoph Paul Hartmann: Das jahrhundertealte Geheimnis der sieben Todsünden, 2019. <https://www.katholisch.de/artikel/23522-das-jahrhundertealte-geheimnis-der-sieben-todsunden>

り、「怠惰」は七つの大罪のリストから消えたものの、その後トマス・アクィナス (Thomas Aquinas, 1225-1274) によってこのリストに修正が加えられ、「*acedia*」は七つの大罪に再び組み込まれることとなった。<sup>13</sup> トマスの理論によれば、「*acedia*」は人間の底知れぬ悲しみを示すものであり、単に人間の精神的怠惰を引き起こすのみならず、最終的には彼を神の恩寵を拒否しようとする判断へと至らしめる。<sup>14</sup> つまり、「絶望」は人が持つ救済に関する判断を狂わせ、神の救いが神自身によってなされるという理解を妨げるのである。天才的な活動に必要となる「神聖な狂気 *Furor Divinus*」<sup>15</sup> のようなメランコリーの側面は中世では未だ周知のものではなく、パルチヴァールの「絶望」は彼を神から遠ざけていく。

グルネマンツの教えに従順であることを可能にしたパルチヴァールの「*tumpheit*」は、結果的に彼を「絶望」へと陥れてしまう。パルチヴァールが守ろうとしたその教えは、あくまでも騎士道の教えであり、これに従うことが罪を避ける手段にはなり得ない。本章の冒頭で述べた通り、パルチヴァールが神と人間の関係を封建主従関係的なものとしてとらえていたことにより、彼の絶望は神に対する拒絶へと連鎖していくのである。パルチヴァールの「*tumpheit*」は、グルネマンツの教育を受けてもなお、宗教上否定的な性質を内に残しており、彼の愚かさは本人を神からの離反へと誘う。<sup>16</sup>

竹川はパルチヴァールの罪について論じる際、ハルトマン・フォン・アウエ (Hartmann von Aue, um1160-um1210) の『グレゴリウス』 (Gregorius, 1186-1190) から、神に対する「絶望」と関わる箇所を挙げ、イエスが例え話で用いた迷子の羊や放蕩息子が、神の全能を疑うパルチヴァールと同様のものと指摘している。<sup>17</sup> 『グレゴリウス』の主人

<sup>13</sup> 松根伸治：倦怠と悲しみ—トマス・アクィナスの *acedia* について [中世思想研究, 第 48 号, 2006 年, 5 頁] 参照。

<sup>14</sup> Vgl. Michael Sticklebroeck: Über die desperatio als Ursprungssünde bei Thomas v. Aquin. In: Angelicum Vol. 81, No. 3. 2004, S. 518-519.

<sup>15</sup> 古代ギリシアのヒポクラテスの時代から、黒胆汁が憂鬱質を導くと考えられており、さらに中世ではこの憂鬱質「メランコリア *melancholia*」が体液、並びにこれから生じる病気を指し示していた。ルネサンスに入って以降、才智に秀でた人間は黒胆汁が支配的であるという考えが生まれ、芸術的活動に不可欠なものとしていったのである。Vgl. 伊藤和行：マルシリオ・フィチーノの健康論 [日本医史学会誌, 第 41 巻, 1995 年, 33 頁] <http://jsmh.umin.jp/journal/41-1/index.html>

<sup>16</sup> この非難を受けた時点で、すでに大きな悲しみに暮れる彼であるが、「彼は本物の不実を避けていた *den rehten valsch het er vermiten* (319, 8)」という言葉が記され、その謙譲さにアクセントが置かれる。ネルマンはこの箇所にヴォルフラムの主人公を擁護する立場が表れているとしているが、その点についてはまだ議論の余地があろう。いずれにせよ、この時点ではパルチヴァールが「絶望」によって神に対する疑念を抱いている様子は見られないが、この「不実」と言う語が宗教的な意味合いまでも含むのかは不確かであり、単に騎士としての無礼を指す可能性も拭えない。通例「*valsch*」という語がヴォルフラムにおいては「*triuwe*」の対義語と用いられるというネルマンの論に沿えば、該当箇所では騎士の美德や誠実さの有無が問われていると考えるのが適切であろう。Nellmann (2006) S. 619-620.

<sup>17</sup> 確かに、『グレゴリウス』の中で散見される「疑念 *zwîvel*」に関する記述と、『パルチヴァール』冒頭の詩句「心が疑いと共に住みつけば、それは魂の苦しみとならねばならない *Ist zwîvel herzen nâchgebûr, / daz muoz der sêle werden sûr* (10, 1-2)」との関係性がすでに先行研究の中で度々議論に持ち上げられていることなどから、ここでこの作品に言及することは適当であろう。しかしな

公が経験する「絶望」は、神の恩寵・救済に対する疑念であり、「許されない大罪」として描かれており、同作品の中心的概念の一つである。<sup>18</sup>しかし、現代ドイツ語の「疑念 Zweifel」や「絶望 Verzweiflung」を指す「zwîvel」という語の多義性ゆえに、パルチヴァールの神からの離反のモデルを、ヴォルフラムが『グレゴリウス』に求めたかは明らかではない。<sup>19</sup>ハルトマンにおける「絶望」の神学的な意味内容が明瞭であるのに対し、ヴォルフラムの場合ではこの概念の有り様は曖昧なままである点は、メルテンスの指摘する通りである。<sup>20</sup>『パルチヴァール』における「zwîvel」が持つ意味合いについてはのちに再び触れるが、ここでより注目すべきは、先に紹介したパルチヴァールの幼少期の純真な姿と、絶望ゆえに神に背いた罪人の姿の対比であろう。このコントラストを生み出すのは、まさにパルチヴァールの「tumpheit」であるが、これが引き起こすのは「絶望」や「疑念」のみに留まらない。

## 2.2 傲慢がもたらすもの

パルチヴァールの神からの離反に関して注目すべきは、これが彼の「絶望」のみではなく、彼が抱える「傲慢 *superbia*」によっても生じる点である。カトリックにおける七つの大罪（罪源）に含まれる「*superbia*」は、独語で「Hybris」や「Hochmut」と表記されるものであるが、すでにギリシア神話や聖書などに見られるこの概念を、ボッシュングは「神々に対する侮辱的で不相応な、そしてまた思い昂るのみの態度」と表現している。<sup>21</sup>パルチヴァールの「*superbia*」もまた、墮落や神への反抗を惹起するものであるが、この罪源は「絶望」や「tumpheit」との関わりの中でいかなる様相を呈するだろうか。

「tumpheit」は本来、「調和福音書 *Evangelienharmonie*」の古高ドイツ語訳である『タチアーン』をはじめとした多くの作品において、「傲慢」との密接な関係性が認められてき

---

がら、イエスの比喩はあくまでも悔い改めの重要性を伝えるためのものであるため、疑念に関する議論内でパルチヴァールを放蕩息子と同定することには、些か論の飛躍があると言わねばならない。竹川昭男：Sünde und Sündenvergebung bei Parzival. [西日本ドイツ文学, 第25別冊, 日本独文学会西日本支部編, 2013年, 24頁] 参照。

<sup>18</sup> Peter Wapnewski: *Wolframs Parzival. Studien zur Religiosität und Form*, Heidelberg (Carl Winter) 1955, S. 17.

<sup>19</sup> ヴァプネヴスキは、ヴォルフラムが『グレゴリウス』の「絶望 *desperatio*」を『パルチヴァール』のプロローグにて用いたというシュナイダーの論を否定しているが、両作品の主人公が罪人として抱く「zwîvel」の様相が持つ差異を指摘したうえで、ヴォルフラムが「アンチ・ハルトマン」ないし「アンチ・グレゴリウス」たる作品を書こうとしていたというシュナイダーの論には賛意を示している。プロローグ中の「zwîfel」については本稿で再び触れるが、これとグレゴリウスが経験する「絶望」の関係性も否定しきれず、ヴァプネヴスキとシュナイダーの主張に全面的に従うことは避けたい。Vgl. ebd.

<sup>20</sup> Vgl. Volker Mertens: *Kommentar*. In: Hartmann von Aue: *Gregorius, Der arme Heinrich, Iwein*. Hg. von Volker Mertens. 3. Auflage, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 2014, S. 830.

<sup>21</sup> „(.....) das beleidigende, anmaßende oder auch nur ungeziemende Verhalten gegenüber den Göttern“ Ebd. ボッシュングはギリシア神話において、ゼウス率いるオリュンポスの神々と闘ったティタン族の行動に、最初かつ最も危険な「傲慢さ」を認めることができるとしている。Vgl. Dietrich Boschung: *Hybris. Die eine Todsünde und ihre Ahndung*. In: *Die Sieben Todsünden*. Hg. von Ingo Breuer, Sebastian Goth, Björn Moll und Martin Roussel, Paderborn (Fink) 2014 (=Morphomata; Bd. 27) S. 215.

た。<sup>22</sup> 冒瀆的かつ高慢な態度の原因となり、人を神に抗する者へと変えていく「傲慢」は、近世の愚者文学の中でも諷刺の対象として中心的位置を占めている。ゆえに、パルチヴァールの「tumpheit」もまた「傲慢」と不可分の関係にあるのであるが、これは先に扱った「絶望」や「悲しみ」と相交わりつつ表出する。クンドリーエからの非難ののち、パルチヴァールに対して慰めの言葉をかけたヤンフーゼの女王に対して、彼は自身が悲しみから逃れられない理由を語り始める。以下の引用箇所では、彼が苦しみを被ることとなった原因が述べられる。

私のたしなみの命じるところに  
より、私がこの世の嘲りを受け  
ることとなるならば、彼の教え  
は不完全だったのかもしれぬ。  
不適切な質問を避け、常に無礼  
に対し抗うよう私に諭したのは、  
高貴なるグルネマンツであった。

sol ich durch mîner zuht gebot  
hœren nu der werlde spot,  
sô mac sîn râten niht sîn ganz:  
mir riet der werde Gurnamanz  
daz ich vrâvellîche vrâge mite  
und immer gein unfuoge strite.  
(330 v. 1- 6)

神と自己の関係を、パルチヴァールは封建的主従関係の枠内で捉えたことにより、己の神に対する奉仕が神によって認められなかったとの認識に至った結果、それは彼を「絶望」へと陥れ、彼に神の全能への「疑念」を植え付ける。そしてここでさらに注目すべきは、パルチヴァールが己を神の怒りを被るいわれのない、罪なき者として位置付けている点である。旧約聖書のヨブ記など、義人が神による試練を受けるというテーマを扱った物語は多いが、これらはパルチヴァールの場合とは本質的に異なるものである。

今日に至るまで多くなされてきたパルチヴァールの罪に関する議論に鑑みるに、彼をヨブのような罪なき者と見なすことは困難であるうえ、彼が自らのかつての行動を正当化して神を非難する態度には、彼の神に対する「傲慢さ」が表れている。その様相は、試練の中でも神への信仰を保ったヨブからは程遠く、むしろ自らの尺度で神の恩寵に与ろうとし、この試みが退けられたことで憤るカインを彷彿とさせる。さらに、ハルトマンの『哀れなハインリヒ』（Der arme Heinrich, um 1190）のハインリヒが、自身に降りかかる災難を耐え忍びつつ神を讃えたヨブとは異なり、嘆き悲しむのみであった点もまた、パルチヴァールの失意の只中にある様子と重なるのである。<sup>23</sup> パルチヴァールの「tumpheit」において、

<sup>22</sup> Vgl. Könnker (1966) S. 22.

<sup>23</sup> ハルトマンはハインリヒとヨブを対比させ、後者を理想的な忍耐の持ち主として以下のように描写している。「なぜならば善良かつ忍耐を備えたヨブは、魂の平安のために、この世の病や辱めをその身に受けねばならなかったが、彼はそれゆえに神を讃美し、喜んだのである。」 „wan ez leit Jôb der guote / mit geduldegem muote, / dô ez im ze lîdenne geschach, / durch der sêle gemach / den siechtuom und die swachheit, / die er von der werlde leit / des lobete er got und vreute sich.“ Hartmann von Aue: Gregorius, Der arme

グルネマンツへの甚だしい従順さや、その態度を可能とする本来肯定的なものであるはずの「単純さ」の影は薄れ、これに代わり彼を高慢へと導く愚へとウェイトがかけられていく。

ここまで見てきたように、パルチヴァールの「tumpheit」は、彼が味わう「絶望」を生み、そしてさらには神の救済への「疑念」、加えて己を義として神を罵る傲慢を惹起するような負の側面を持つものである。この「simplicitas」から「superbia」への移行プロセスの中で、純真無垢なパルチヴァールの幼少期と、神への疑いに満ちた彼の様子を対比させることで、彼の愚者概念の二面性が浮き彫りになるのである。このコントラストが持つさらなる側面について理解を深めるべく、パルチヴァールの「tumpheit」を罪の議論に照らしつつ、引き続き考察を進めていきたい。

### 3. 愚かさとは無知

#### 3.1 『パルチヴァール』の神学的解釈への批判

パルチヴァールの罪は現在までに、ユリウス・シュヴィーテリングらを始めとする多くの研究者による分析の対象として扱われてきた。シュヴィーテリングは『パルチヴァール』の根幹を宗教問題として捉え、パルチヴァールがアルトゥースの従兄弟であるイテールを自身の親族と知らずに殺害し、親族殺しの罪を犯してしまったことや、加えてアンフォルタスに彼の苦しみの原因を問うことを怠った原因が、アダム以降に人間が背負わなければならないなくなった原罪にあるという見解を提示している。<sup>24</sup> この論は、主人公の行為が無意識によるものであっても、物語内で大きな「罪」と扱われねばならないことを説明づけるものであった。トレフリツェントは神に憎しみを抱くパルチヴァールに忠告を与えるべく、彼に対して人間の罪について語る。

---

Heinrich, Iwein. Hg. von Volker Mertens. 3. Auflage, Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 2014, S. 238. v 141-145.

<sup>24</sup> Vgl. Julius Schweiering: *Mystik und höfische Dichtung im Hochmittelalter*, Tübingen (Max Niemeyer) 1960, S. 54-55.

神は地から至高のアダムを  
成して、彼の肉体から我々  
に災いをもたらしたエヴァを  
取り出し、彼女は創造主に  
従わず、我々の喜びは潰え  
てしまったのだ。

got worhte ûs der erden  
Adâmen den werden:  
von Adâms verhe er Even brach,  
diu uns gap an daz ungemach,  
dazs ir schepfære überhôrte  
unt unser freude stôrte.  
(463, 17-22)

隠者はこのアダムとエヴァによる墮罪に関する事柄に続き、彼らの息子カインがアベルを打ち殺したことで、「清い土地の純潔を奪うこととなった血が多く流された *ûf die reinen erdenz bluot / viel, ir magetuom was vervarn* (464, 18-19)」とパルチヴァールに説く。アダムの一族が罪を積んだ荷車である *daz diu sippe ist sünden wagen* (465, 5)」がゆえに、人間は原罪を背負うこととなったのである。この箇所をふまえつつシュヴィーテリングは、「罪は故意による行為だけではなく、世代から世代へ影響し、人を罪の状態に陥らせる力である」<sup>25</sup>と述べたうえで、パルチヴァールによる無意識の行動を罪と結びつけている。この主張にはしかし、クレチアンの作品でペルスヴァルが母を見捨てて去った罪が、彼が聖杯王に問いかけることを阻み、「怠りの罪 *Versâummissünde*」に繋がったというような、明確な因果関係が『パルチヴァール』内で述べられていないため、説得性に欠けるなどの問題点がある。<sup>26</sup>そのため、シュヴィーテリングによる「パルチヴァール原罪論」は未だ議論の余地を残している。

パルチヴァールの行動の所以を、主に原罪という神学的要因に帰する論に対し、ルーは主人公が問いかけを怠った原因が「個人の特性 *ein personales proprium*」<sup>27</sup>にあるとして、神学的文脈のみに沿った考察に偏重することに批判を加えている。ルーによれば、パルチヴァールの「*tumpheit*」はアンヴィヴァレントな性質を有しており、「憂を知らぬ天真爛漫さが、原罪の症候であり、なおかつ誤謬や自制心の無さを意味する無知 *ignorantia* に急変する」<sup>28</sup>可能性を孕んでいる。ここでルーは、この性質を神学的解釈に則って理解することの限界を指摘し、作品のプロローグの一部を挙げたうえで、パルチヴァールの「本性 *Natur*」に鑑みた論を展開している。以下に当該の箇所を引用する。

<sup>25</sup> „Sünde ist nicht nur willentliche Tat, sie ist eine Macht, die von Geschlecht zu Geschlecht weiter wirkt und in sündhaften Zustand versetzt.“ Ebd., S. 55.

<sup>26</sup> クレチアン・ド・トロワ（天沢退二郎訳）：ペルスヴァルまたは聖杯の物語〔フランス中世文学集2, 愛と剣と（新倉新一, 神沢栄三, 天沢退二郎訳）白水社, 1991, 261頁〕参照。

<sup>27</sup> Kurt Ruh: *Höfische Epik des deutschen Mittelalters. Teil 2*, Berlin (Erich Schmidt) 1980, S. 78.

<sup>28</sup> "Die unbekümmerte Naivität schlägt in *ignorantia* um, die Symptom der Erbsünde ist, Desorientiertheit, Unbeherrschtheit bedeutet." Ebd., S. 79.

疑いが心の隣人であるならば、  
それは魂にとって苦しみでなければならぬ。  
恐れを知らぬ者の心持ちが  
鵠さながらに入り混じれば  
これは恥辱と誉れを意味する。  
しかしその者は幸福になるのだ。  
なぜならば、天国と地獄が共に  
彼に属しているからである。  
心が移ろいやすい者の色は  
全くもって黒く、まるで  
影のような黒さである。  
そして白色を備える者は、  
不動の心を持つ者である。

Ist zwîvel herzen nâchgebûr,  
daz muoz der sêle werden sûr.  
gesmæhet unde gezieret  
ist, swâ sich parrieret  
unverzaget mannes muot,  
als agelstern varwe tuot.  
der mac dennoch wesen geil:  
wand an im sint beidiu teil,  
des himmels und der helle.  
der unstæte geselle  
hât die swarzen varwe gar,  
und wirt och nâch der vinster var:  
sô habet sich an die blanken  
der mit stæten gedanken.

(1, 1-14)

ルーはこの箇所に関して、「いずれにせよこれを神学を用いて解釈することはできず、できたにせよ部分的なものだ。」<sup>29</sup>としたうえで、「心が移ろいやすい者 *der unstæte geselle*」＝黒＝地獄、「不動の心を持つ者 *der mit stæten gedanken*」＝白＝天国という対照的關係を組み立てている。さらにルーは、パルチヴァールを両者の中間的存在、つまり地獄と天国が「両方とも彼に属し *an im sint beidiu teil* (1, 8)」、「聖書的な意味での人間そのもの *im biblischen Sinne der Mensch schlechthin*」と見なすことができると述べる。<sup>30</sup>パルチヴァールの問いかけの怠りを、神学的解釈から離れて彼の「鵠的な本性 *Elsternnatur*」で説明するというルーの試みは、結果的に聖書とパルチヴァールの存在の結びつきを強め、皮肉にも「罪人」や「救済」などに関するさらなる解釈への門戸を開いてしまっている。そもそも、西洋中世の愚者概念そのものがキリスト教に深く根差すものである以上、『パルチヴァール』における「*tumpheit*」についての分析は神学的議論を離れることは不可能である。<sup>31</sup>しかしながら、ルーがここで言及したパルチヴァールの愚の性質とプロローグの関係性は、作品を貫く原罪の問題を検討するうえでの鍵となろう。

<sup>29</sup> "Mit Theologie jedenfalls ist er nicht zu interpretieren, es sei denn punktuell." Ebd., S. 82.

<sup>30</sup> Ebd.

<sup>31</sup> ツァルンケによれば、「愚 *stultus*」と「知 *sapiens*」の対立關係は旧約聖書内で多く確認できるものであり、この書物を通して愚者概念はドイツ文学へと流入していった。それは抽象的な概念としてではなく、人々を愉しませる道化のイメージに結びついており、こうした職業道化の存在はすでに 12 世紀の後半のドイツにて確認されていたのである。Vgl. Friedrich Zamcke: *Sebastian Brants Narrenschiff*, Hildesheim (Georg Olms) 1961, S. 47.

### 3.2 原罪としての愚

ここまで主に、『パルチヴァール』の「tumpheit」に焦点を当て、主人公の愚者概念と彼の二つの罪源の関係性について論じてきた。その愚かさゆえ、醜い魔女クンドリーエから「天の最高の御手の前では、そなたは地獄行きを命じられる *gein der helle ir sît benant ze himele vor der hôhsten hant* (316, 7-8)」と言い渡されていたパルチヴァールが、以降どのような形で救済を受けるに至ったのかを概観しつつ、あらゆる罪源の根源となる原罪と「tumpheit」の結びつきについて論じ、本稿の締めくくりとしたい。

諸国を放浪して聖杯を探し求めていたパルチヴァールは、ある老騎士の勧めにより隠者トリフリツェントに会うこととなる。この隠者からパルチヴァールは原罪について、またその原罪を抱える人間が救済の恵みに与るための改悛が必須であることを学び、忠告に従い神を疑わない者となる。そうすることで初めて、パルチヴァールはアンフォルタスへの問いかけを通して聖杯王となることが可能となる。聖杯王となることが直接的に天上の至福へと繋がる訳ではないにせよ、「神の慈悲」がパルチヴァールに向けられることで、アンフォルタスの傷の治癒、さらにパルチヴァール自身の救済へと繋がるのである。

パルチヴァールの「tumpheit」が、純真さと罪の相反する性質の源泉であり、その概念が原罪とも無縁でないことは、先のシュヴィーテリングとルーの論を紹介する中で確認した通りである。ブムケは、アウグスティヌスに由来する「無知概念 *ignorantia-Begriff*」に鑑みながら、パルチヴァールの幼年期を特徴付ける「知識の無さ」が、単なる「知らないこと *Nichtwissen*」とは区別され、不可欠な知識の欠陥、つまり原罪をその起源とする「無知 *ignorantia*」であると論じている。<sup>32</sup> さらにグルースは「*ignorantia*」がパルチヴァールの行動に与える影響について、以下のように述べる。

(.....) あらゆる人間の倫理が欠乏していることは、墮落の結果とみなされるのである。この無知の形式は、パルチヴァールが騎士を神と間違えた際に表れ、騎士の身分を手に入れることを強く願わせ、彼を親類に対する取り返しのつかない三つの罪（母の死、イテールの殺害、アンフォルタスの救済の失敗）へと巻き込み (.....)

[.....] the moral deficiency attributed to every human being as a result of the Fall. This type of ignorance, paradigmatically revealed at the moment of Parzival's confusion of knights with God, leads the hero in his inordinate pursuit of knighthood, involving him in three irremedial sins against kin (the death of his mother, the murder of Ither, and the failure to redeem Anfortas) [.....].<sup>33</sup>

<sup>32</sup> Bumke (2001) S. 102-103.

<sup>33</sup> Arthur Groos: *Romancing the Grail*, New York (Cornell University) 1995, S. 66.

ここで述べられているような罪の連続性は、アウグスティヌスの罪障説をベースとしたいわゆる「罪のオートマティズム」に通ずるものである。<sup>34</sup> ハースがヴォルフラムが用いた「tumpheit」の性質について、「自己、他者、さらに神についての認識の欠落 *Mangel an Selbst-, Menschen- und Gotteserkenntnis*」<sup>35</sup> と説明するとき、その解釈の基盤となっているのは、この「*ignorantia*」である。そして、自己認識と神認識の不足は——ハースが論じる聖ベルンハルトの神学とヴォルフラムの結びつきを前提とするならば——「傲慢」に通ずるのである。<sup>36</sup>

泉谷もまた、「tumpheit」が「*ignorantia*」へと変じ、「単純さ *simplicitas*」と原罪の印である「*ignorantia*」が表裏一体のものとして現れるというルーの論をふまえ、グルネマンツの教えが「tumpheit」の変質をもたらし、問いを怠るという最大の罪を引き起こしたと述べる。<sup>37</sup> ここで泉谷のように「tumpheit」がグルネマンツの教えによって変質したと考えるよりも、彼の教えによって捨て去られたパルチヴァールの愚が限定的なものであり、原罪の表出としての愚が残っていたとする見方が適切であろう。それは、原罪が人間に先天的に備わったものであり、これがパルチヴァールの全生涯を通して彼を拘束するためである。

続いて、プロローグ冒頭の「*zwîvel*」に再び焦点を当てるが、これについては今日までに多くの解釈がなされてきており、ネルマンは先行研究をまとめて幾つかの可能性を紹介している。そこでは「*zwîvel*」が、クンドリーエの弾劾を受けたのちにパルチヴァールが神に対して抱くこととなった、不信を示す「疑念」であるというものや、先にみた『グレゴリウス』における「絶望 *desperatio*」と同様のものを指し示すという論などが挙げられている。自己の「tumpheit」によって「絶望」に陥り、神の全能に対する「疑念」へと進むパルチヴァールの様子に鑑みれば、「*zwîvel*」の意味合いを一つだけに限定するのではなく、むしろ「*zwîvel*」がこの二つの可能性を内包しているものとするのが適切であろう。<sup>38</sup> そしてプロローグについては、愚と原罪がこれを支える基盤となっており、「*zwîvel*」が「心の隣人であるならば」という表現からは、パルチヴァールの心と共存する原罪の表れとしての愚が、彼に神からの離反を促し、その魂を不幸に陥れる機会を虎視眈々と伺う様子を連想させる。これに続く記述については、「不動の心＝白＝天国」、さらに「うつろいやすき＝黒＝地獄」の対照関係を組み立て、その中間的存在としてパルチ

<sup>34</sup> 伊藤泰治、馬場勝弥、小栗友一（共編）：「解説」〔ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ：パルチヴァール、郁文堂、1998年所収〕454頁。

<sup>35</sup> Alois Haas: *Parzivals tumpheit bei Wolfram von Eschenbach*, Berlin (Erich Schmidt) 1964, S. 274.

<sup>36</sup> Vgl. ebd., S. 275.

<sup>37</sup> 泉谷千尋：クンドリーエの弾劾とパルチヴァールの罪〔ドイツ文学, 110号, 2003年所収〕187頁参照。

<sup>38</sup> Vgl. Nellmann (2006) S. 446.

ヴァールが存在するというルーの論に従いたい。このパルチヴァールのあり方は、原罪を背負う人間一般に通じ、その人間たちもやはり「*simplicitas*」と「*ignorantia*」の間を行き来する愚を抱える。よって、プロローグで用いられた鵲の比喻は、「パルチヴァールの全人格の要約」<sup>39</sup>であるのみならず、常に墮落の危険に晒されている人間の姿をも映し出していく。

原罪はパルチヴァールの愚かさとして、幼少期の無垢でありながら愚かな状態から、「*ignorantia*」が顕著となるアンフォルタス城での振る舞い、さらにこれに続く「絶望 *desperatio*」や「傲慢さ *superbia*」を主な要因とする墮落へのプロセスの中で、段階的に表出の仕方を変えていく。そして、隠者トリフリツェントから罪についての教えを受け、改悛を経て神に対し従順な信仰者として聖杯城の主となるパルチヴァールは、この愚の表出プロセスの最終段階にある。そこでは、騎士として宮廷社会を生きるうえで必要となる作法を身につけ、神に対する誤った認識を捨てたパルチヴァールが、一つの聖俗界の理想形として描かれる。この段階に至ることで、パルチヴァールが幼少期に母のもとで抱いていた「単純さ」は再び色濃く表れるのであり、それにより生じる強い「従順さ」のベクトルは神へと向けられていく。パルチヴァールの愚者概念は、「*simplicitas*」を起点としてこれを終着点とする、円環のような構造により支えられるのである。

## 結語

「*tumpheit*」が中世以前から罪と分かれ難い関係にあったことは本稿の冒頭でも述べた通りであるが、その強い結びつきという点では、罪源やこれの源である原罪においても違いはない。愚者概念が神学の文脈の中で、アダムの墮罪以降に人間が背負うこととなった原罪による、「精神的、道徳的、宗教的能力の決定的弱体化」<sup>40</sup>までもを包括するためである。中世後期には、いわゆる『八人の愚者の図 *Acht Narren Bilderbogen*』<sup>41</sup>をはじめとする作品が生まれ、七つの大罪と愚者概念の密接な結びつきが視覚化される形で表現される。<sup>42</sup> 罪源や原罪の内部の愚かさに着目し、そこに道化の文化を織り込む愚者文学の伝統は、

<sup>39</sup> 泉谷 (2003) S.183.

<sup>40</sup> „(.....) eine entscheidende Schwächung seiner geistigen, sittlichen und religiösen Fähigkeiten“ Köneker (1966) S. 9.

<sup>41</sup> この図の中では、八人の愚者がそれぞれ「高慢や驕りの中で生きる者は愚か者。彼の最期は不幸となる *Der ist ain nar, der lebt in hochvart und in ubermuot; des end wirt nit guot*」など、七つの大罪と結びつけて諷刺が行われている。Vgl. *Bilderatlas zur Geschichte der deutschen Nationalliteratur: eine Ergänzung zu jeder deutschen Literaturgeschichte*. Hg. von Gustav Könecke, Marburg (R.G. Elwert) 1887, S. 58.

<sup>42</sup> 『八人の愚者の図』では「*superbia*」を示す愚者をのぞき、「貪欲 *Habgier / avaritia*」や「怠惰 *Trägheit / acedia*」など七つの大罪を示す明確な言葉は用いられていない。これについてブユエルン・モールは、この木版画上の愚者が、罪源の理解を世俗へ広めようという意図のもと描かれているにすぎないと論じる。モールはさらにケネカーの言葉を借りて、ここで「罪概念の平坦化 *Verflachung des Sündenbegriffs*」 Köneker (1966) S. 39 が生じているとする。七つの大罪は愚かさの最上級の表れであり、「悪徳 *Laster*」は「無知によって *aus Unwissenheit*」犯される。そのため、図の中で罪源のリストを明確に視覚化させる必要はなく、これによって愚者は本来の人間のイメージへと接近していく。モールやケネカーの論からは、罪源と愚の連続性を読み取れるが、世俗への愚

以降ブラントを始めとする近世の作家達によって受け継がれていくが、この流れはすでにヴォルフラムの時代から始まっていた。

騎士文化の衰退とともに、「tumpheit」のみならず「tôrheit」などの愚を示す語は、キリスト教における罪理解の影響を受けつつその性質を変化させていく。<sup>43</sup>活版印刷やルター訳聖書の登場によって、「narre」といった現在の「Narr」に相当する語もその使用頻度を高めていき、性質の変化はより勢いを増していく。<sup>44</sup>愚者概念の変遷とともに、その概念が持つ多義性・多層性は一層高められていくが、「単純さ」という聖者的な愚かさと相反する原罪による宗教的愚や、これと並存する形で描かれる、騎士社会における未熟さを示す愚など、すでにヴォルフラムの時代の「tumpheit」もまた決して単調な概念たりえない。しかしながら、本稿で行った考察を通して、中世から近世にかけて愚の概念が経てきた変容プロセスの一端を、パルチヴァールの内に認めうるであろう。中世の愚者概念は、キリスト教の影響を受けつつ宮廷から世俗へと次第にその拠り所を移し、愚者文学の中で「阿呆鏡」として人間の愚と罪の様相を映し出す。その過程の萌芽として、パルチヴァールの愚を特徴づける二面性は、「simplicitas」と「ignorantia」の間で揺れる人間一般の愚と罪を提示するのである。

---

者概念の移行過程においても、「ignorantia」と罪の連関が重要となることが確認できよう。Vgl. Bjöm Moll: Das Instrument der Sünde. Jean Pauls Texte zur „Dumheit“. In: Die Sieben Todsünden. Hg. von Ingo Breuer, Sebastian Goth, Bjöm Moll, Martin Roussel, Paderborn (Wilhelm Fink) 2015, S. 80.

<sup>43</sup> ケネカーの説明によれば、「tumpheit」と「tôrheit」は元来明瞭に異なる意味合いを持っており、前者は原罪ゆえの人間の欠陥としての側面を持ち、より霊的かつ根本的な精神状態と関わるものであり、後者は知的ないし肉体的欠陥を指し、ある人物が社会的規範内で生きる通常の人々からは除外された、特殊かつ例外的存在であることを示す。しかしながら、騎士階級文化の衰退とともに、「tumpheit」と「tôrheit」の間の境界も曖昧になっていく。宮廷時代の盛りから終わりごろに成立した教訓詩の中で、「愚 tôrheit」を持つ「愚者 tôren」と、神からの賜物である「知 wîsheit」を持つ「賢者 wîsen」の対比がなされる頃にはすでに、「tôrheit」は「tumpheit」の意味も担う語として扱われている。Vgl. Könniker (1966) S. 22-23.

<sup>44</sup> 「愚者」を意味するラテン語の「stultus」に対応する語として、15世紀後半の独語の聖書にて「tum」、後に「tor」が使われるようになるが、この流れに大きな修正を加えたのがルターであり、彼は自身の翻訳の中で「愚者」に対して「Narr」を多く用いていく。ここで、職業道化が意図されていないことは明らかであるが、ルターがヘブライ語の意味内容をドイツ語で忠実に再現することなく、あえてこの語を用いたのは、当時の民衆に馴染みのある表現を重要視したためであるとケネカーは論じている。Vgl. ebd., S. 11.

# Struktur der Narrheit und Ursünde

## Sündhaftigkeit in Wolframs *Parzival*

Yuya MORISHITA

Im Diskurs über die Narrenidee im deutschen Mittelalter ist die *tumpheit*, von der das Wort ‚Dummheit‘ stammt, besonders wichtig. Schon im Althochdeutschen wurde *tumpheit*, besonders im religiösen Kontext, in negativer Bedeutung verwendet. Im Hochmittelalter bildete der Begriff ein zentrales Element des Versromans *Parzival* (um 1200) von Wolfram von Eschenbach (um 1160 -um 1220). Sein breiter Anwendungsbereich hat einen ähnlichen Bedeutungsumfang wie *narrheyt* oder *narr* bei Sebastian Brant (1457-1521), dem Autor des *Narrenschiffs* (1494). Die Semantik von *tumpheit* ist allerdings nicht nur negativ wie in ‚Torheit‘ bzw. ‚Dummheit‘, sondern enthält auch einen positiven Aspekt. Die *einvaltekeit* (*simplicitas*), die zu der *tumpheit* gehört, wurde in der mittelalterlichen Theologie für eine Tugend gehalten. Ziel dieser Studie ist es, die sich überschneidenden Beziehungen zwischen *tumpheit*, *simplicitas* und der negativen Narrheit oder *ignorantia* aufzuklären. Die *ignorantia* trägt jeder Mensch als Folge der Ursünde ohne Ausnahme in sich. Bei *Parzival* bedeutet sie das „das Fehlen von Wissen, das er haben sollte, um sein Fehlverhalten zu vermeiden.“ (Bumke, 2001)

Die *simplicitas* von *Parzival* erscheint am auffälligsten in seiner Kindheit, in der er durch seine Mutter Herzloyde von der ritterlichen Welt ferngehalten wurde. Eines Tages stellt er Herzloyde die Frage „*ôwê muoter, waz ist got?*“ (119, 17) und bekommt von ihr die Antwort „*er ist noch liehter denne der tac*“ (119, 19). Gleich darauf wendet er ihre Aussage falsch an und verwechselt die leuchtenden Ritter mit Gott. Die fehlerhafte Anwendung einer Lehre ist *Parzivals* initiales Handlungsmuster. Sie gipfelt in der Unterlassung der Mitleidsfrage an den Fischerkönig Anfortas, der an einer schweren Verletzung leidet. *Parzival*, der bei Gurnemanz sein höfisches Verhalten lernt, bekommt nämlich die Lehre „*im sult niht vil gevârên*“ (172, 18) und wendet sie gegenüber Anfortas an, obwohl *Parzival* ihn nach seinem Leiden hätte fragen sollen, um ihn auf diese Weise zu erlösen. Als Folge dieser Unterlassung verliert er „*êre und rîterlîcher prîs*“ (255, 27). Verzweifelt empört er sich gegen Gott. Als *Parzival* den Artushof verlassen will, sagt ihm Artus' Neffe Gawan: „*dâ geb got gelücke zuo*“ (331, 27). Darauf antwortet *Parzival* abweisend: „*wê waz ist got?*“ (332 v. 1), anklingend an die Frage „*ôwê muoter, waz ist got?*“ (vgl. Nellman 1994). In diesen Aussagen wird ein Kontrast sichtbar zwischen dem kindlichen aber reinen Gemüt und von dem verzweifelten sündhaften Gemüt, mit dem sich *Parzival* von Gott abwendet.

*Parzivals* Abwendung von Gott wird durch seinen *zîwîfel* (*desperatio*) verursacht, die zwei möglichen Aspekte umfasst: die Verzweiflung wegen des Verlusts seiner Ehre und der Zweifel an der Gnade Gottes. Die *desperatio* wird wie die *tristitia* der *acedia*, einer der sieben Todsünden, zugeordnet. Und sie wird durch

Parzivals falsche Auffassung Gottes ausgelöst: mit Gott als Feudalherr, von dem Parzival eine Belohnung erwarten kann (Nellmann 1944). Bei der Aufkündigung des weiteren Dienstes kennzeichnet die *superbia* (Hybris oder Hochmut) Parzivals Verhalten. Sie ist nicht nur eine der Todsünden, sondern unterhält schon in der althochdeutschen Literatur, darunter im *Tatian*, eine enge Beziehung zur *tumpheit*. Parzivals Verstocktheit, die durch die oben genannte *ignorantia* hervorgebracht wird, ist eng mit der *superbia* verbunden. Durch die *ignorantia* begeht Parzival nacheinander drei große Sünden (Tod von Herzeloide, Mord von Ither, Verzicht auf die Frage nach Anfortas' Qual; vgl. Groos 1995). In diesem Prozess ändert die Ursünde Parzivals ihre Erscheinungsform, und nach der Begegnung mit Anfortas, durch dessen Lehre Parzival über Sünde lernt und Buße tut, nimmt sie ihre letzte Ausprägung an. Dabei wandelt sich Parzival zu einem Idealbild für die geistliche und weltliche Sphäre. Seine *simplicitas*, die er seit seiner Kindheit in sich trägt, wird dabei nochmals stark betont, und sein Gehorsam gilt dieses Mal nicht seiner Mutter, sondern Gott.